

益岡隆志

1. はじめに

叙述類型論 (益岡 (1987, 2008, 2021), 影山 (2009a, 2012, 2021) ・ Kageyama (2018))

事態の叙述における 2 つの重要な類型の区別

◇モノの叙述 (「属性叙述」 (property predication))

モノに備わった属性の叙述

- (1) 日本は島国だ。
- (2) あの人は (性格が) 優しい。

属性叙述構文の構成: 対象表示部分と属性表示部分の相互依存関係

「主題-解説」という二部構造

本来的属性: 「カテゴリー属性 (カテゴリー所属)」 (名詞述語構文)

「性質属性 (性質所有)」 (形容詞述語構文)

◇デキゴトの叙述 (「事象叙述」 (event predication))

特定の時空間に実現するデキゴト (事象) の叙述

- (3) 親が子供に鍵を渡した。

事象叙述構文の構成: 述語が主要部

述語・項構造, 時間性 (テンス・アスペクト) の関与

動的事象 vs. 静的事象 (一時的状態)

- (4) あの人は好調だ。

本発表の目標

事象と属性のつながりの在り方を日本語のラレル形動詞構文の事例を通して検討する。

本発表の構成

第2節 ラレル形動詞構文の概要

第3節 受動構文における属性の派生

第4節 可能構文における属性叙述

2. ラレル形動詞構文の概要

ラレル形動詞構文とヴォイス

日本語のヴォイス体系 (益岡 (準備中)): 語彙的ヴォイスと文法的ヴォイス

ラレル形動詞構文: *rare(-ru)* の付加

[多義的] 自発・可能・受動・尊敬

橋本 (1969), 寺村 (1982), Shibatani (1985) ・ 柴谷 (2000), Jacobsen (1992), 尾上 (2003), 川村 (2012)

Shibatani (1985) : “agent defocusing”

スル (ACT) からナル (HAPPEN) へ : 行為から事象発生へ (動作主の背景化)

◇自発構文・可能構文の場合

- (5) 自然と故郷のことが思い出された。
- (6) この質疑応答では、日本語が使える。
- (7) あの人には日本語が話せる。

◇受動構文の場合

ACT から HAPPEN-TO-X (X の前景化) へ⇒主語 (中心項) の交替

- (3) 親が子供に鍵を渡した。[スル (ACT)]
- (8) 子供が親に鍵を渡された。[ナル (HAPPEN-TO-X)]

以下、事象と属性のつながりを見るために、受動構文 (3 節) と可能構文 (4 節) を取り上げる。

3. 受動構文における属性の派生

3.1 受動構文と叙述の種類

受動構文 : ナル (HAPPEN-TO-X) ⇒事象叙述 (動的事象)

受動構文の二類 (Kuroda (1979), 益岡 (2019))

◇「受影受動」(固有) : [X が Y ニ〜V-ラレ(ル)] (受影者 X と与影者 Y の二者関係)

直接受影受動と間接受影受動

- (8) 子供が親に鍵を渡された。
- (9) 親が子供に一晩中泣かれた。

◇「中立受動」(非固有) : [X が (Y ニヨッテ, など) 〜V-ラレ(ル)]

- (10) マッキンリーは、当時ニューヨーク州バッファローで開催中の博覧会を訪れた際、ポーランド系アメリカ人のアナーキスト、レオン・チョルゴッシュによって銃撃され、八日後に死去した。(中野耕太郎「20世紀アメリカの夢」)
- (11) 昭和22(1947)年に末永雅雄博士らの手によって発掘調査が実施された。(黒姫山古墳(大阪府堺市)の説明板)

3.2 属性の含意 (益岡 (1987), 影山 (2009b, 2021), 岸本・影山 (2012), 三原 (2019))

受影受動の場合

- (8) 子供が親に鍵を渡された。
- (9) 親が子供に一晩中泣かれた。
- (12) *この雑誌は、太郎によく読まれている。(益岡 (1987))
- (13) *この論文は、チョムスキーに数回読まれた。(益岡 (1987))

受影受動としては成り立たなくても、属性叙述として許容され得る。

(14) この雑誌は、10代の若者によく読まれている。(益岡(1987))

「雑誌」：特徴項目としての“読者”の喚起⇒性質属性の含意

(15) この論文は、チョムスキーに数回引用された。(益岡(1987))

「論文」：特徴項目としての“実績”の喚起⇒「履歴属性」(→性質属性)の含意

属性叙述への道筋

事象を表す叙述における属性の含意：言語外知識の介在

4. 可能構文における属性叙述

4.1 自発構文・可能構文と叙述の類型

| |
|--|
| 寺村(1982), Fellbaum(1985), 柴谷(2000), 尾上(2003), 本多(2005, 2021), 渋谷(2006), 川村(2012), 吉田(2021) |
|--|

自発構文と可能構文の意味的連鎖(柴谷(2000), 渋谷(2006), 川村(2012), 吉田(2021))

[自発(動的事象)→事象実現(動的事象)→状況可能(静的事象)・能力可能(属性叙述)]
史的变化に対応

◇自発：無意志的实现

(5) 自然と故郷のことが思い出された。

◇事象実現：意志的实现(「意図成就」(尾上(2003)), 「実現可能」(渋谷(2006)))

(16) その子は上手に歌えた。

4.2 可能構文における叙述のタイプ変容

事象実現から事象実現の可能性の存在へ

(6) この質疑応答では、日本語が使える。

“状況可能”：事象実現の条件が特定の状況に帰される⇒一時的状態(静的事象)

(7) あの人は日本語が話せる。

“能力可能”：事象実現の条件が主体(動作主)に帰される⇒属性叙述

属性叙述を表す可能構文(属性叙述型可能構文)の二類(cf. 寺村(1982))

◇「動作主型」(上記の能力可能)：主体の動作主性の背景化

(7) あの人は日本語が話せる。

事象実現の条件が主体の能力に帰される

主体が事象実現の能力(属性)を所有⇒性質属性(形容詞述語構文と同質)

◇「非動作主型」：動作主の取り外し(cf. 吉村(2020))

(17) この茸は食べられる。

(18) この鋏はよく切れる。

(19) この町は快適に暮らせる。

事象実現の条件が対象や道具の属性に帰される

対象や道具が事象実現の属性を所有⇒性質属性（形容詞述語構文と同質）

属性叙述への道筋

主体や対象の属性を表す叙述へのタイプ変容

5. まとめ

受動構文・可能構文における事象と属性のつながりの在り方 (cf. 鈴木 (2022))

◇受動構文：受影受動構文の場合

事象を表す叙述における属性の含意：言語外知識の介在

◇可能構文：属性叙述型可能構文の場合

主体や対象の属性を表す叙述へのタイプ変容

参考文献

- 尾上圭介 (2003) 「ラレル文の多義性と主語」『月刊言語』32 (4).
- 影山太郎 (2009a) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136.
- 影山太郎 (2009b) 「状態・属性を表す受身と過去分詞」影山太郎編『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』くろしお出版.
- 影山太郎 (2012) 「属性叙述の文法的意義」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版.
- 影山太郎 (2021) 『点と線の言語学—言語類型から見えた日本語の本質—』くろしお出版.
- 川村大 (2012) 『ラレ形述語文の研究』くろしお出版.
- 岸本秀樹・影山太郎 (2011) 「構文交替と項の具現化」影山太郎編『日英対照 名詞の意味と構文』くろしお出版.
- 柴谷方良 (2000) 「ヴォイス」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法1：文の骨格』岩波書店.
- 渋谷勝己 (2006) 「自発・可能」小林隆他『シリーズ方言学2：方言の文法』岩波書店.
- 鈴木彩香 (2022) 『属性叙述と総称性』花鳥社.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版.
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』岩波書店.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.
- 本多啓 (2021) 「中間構文を含む、英語における無標識可能表現のネットワーク」天野みどり・早瀬尚子編『構文と主観性』くろしお出版.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志編『叙述類型論』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2019) 「主観性から見た日本語受動文の特質」澤田治美・仁田義雄・山梨正明編『場面と主体性・主観性』ひつじ書房.
- 益岡隆志 (2021) 『日本語文論要綱—叙述の種類の観点から—』くろしお出版.
- 益岡隆志 (準備中) 「日本語で見るヴォイス—英語との対照—」
- 三原健一 (2019) 「属性叙述受動文の描く世界」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』49.

- 吉田永弘 (2021) 「可能」「自発」の歴史的対照—「る・らる」と「可能動詞・られる」— 野田尚史・小田勝編
『日本語の歴史的対照文法』和泉書院.
- 吉村公宏 (2020) 『英語中間構文の研究』ひつじ書房.
- Fellbaum, Christiane (1985) Adverbs in agentless actives and passives. *CLS 21*. Chicago Linguistic Society.
- Jacobsen, Wesley M. (1992) *The transitive structure of events in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Kageyama, Taro (2018) Events and properties in morphology and syntax. In: Yoko Hasegawa (ed.) *The Cambridge handbook of Japanese linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kuroda, S.-Y. (1979) On Japanese passives. In: George Bedell et al. (eds.) *Explorations in linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha.
- Shibatani, Masayoshi (1985) Passives and related constructions. *Language* 61 (4).